HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	献辞
Author(s)	内田, 和男
Citation	經濟學研究, 48(4)
Issue Date	1999-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/32138
Type	bulletin (article)
File Information	48(4)_Pvi-vii.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

献　　辞

白井孝昌教授は，平成11年３月31日付けをもって停年退官される。教授は永年にわたり本学部の学生，大学院生の教育指導にあたるとともに，多くの研究成果を挙げられ，北海道大学とわが経済学部の発展のために多大の貢献をなされた。この功績に報いるため，本誌を教授の退官記念号として献呈したい。

教授は香川大学経済学部を昭和33年３月に御卒業の後，翌年昭和34年４月に大阪大学大学院経済学研究科経済政策専攻に進学され，研究者としての途へと歩まれた。大学院では，わが国の近代経済学とりわけ経済政策の理論的先駆者であった故熊谷尚夫教授の指導をうけられた。昭和37年10月に大阪大学大学院経済学研究科博士課程を退学し，同年11月に大阪大学経済学部助手に採用され，昭和42年６月には講師に昇任されている。その後，松山商科大学経済学部助教授として赴任された後，昭和47年４月迎えられて本学経済学部助教授に御就任，昭和55年４月には教授に昇任された。この間，昭和58年４月から１年間大阪大学社会経済研究所教授を兼任されている。

本学赴任後今日までの永きにわたり，教授は「価格理論」,「国民所得論」，そして「経済学原理」の授業科目を担当され，その豊富な学識と高い見識とをもって，学部学生，大学院学生の教育，指導に当たり，数多くの優れた人材を世に送り出している。

教授の研究経歴と業績は，２つの主要な研究分野に大別することができる。１つは，教授が27歳で大阪大学経済学部助手に採用された昭和37年から，フルブライト客員研究員としてイエール大学に留学し，ノーベル経済学賞受賞者ジェームズ・トービン教授の指導の下で貨幣理論の研究に従事した昭和50年までの時期の研究であり，それは一般均衡理論をベースにした理論分野の研究である。このうち特筆すべきは，昭和37年12月に発表された論文「新古典派的経済成長理論に関する一研究」である。当時，学界の代表的論文であったUzawaの“On a Two-Sector Model of Economic Growth”について，教授はモデルの学説史的文脈とその構造の明快な解説の上に，Uzawa論文の中心的命題である資本装備率による定常成長径路の安定条件に対して，それとは全く独立の安定条件，すなわち両部門の代替の弾力性の和が１以上であるならば，成長径路の安定が保証されることを示した。この研究は学界で高く評価され，国内の多くの研究者に，２部門成長モデルに関するこの方向への分析展開を触発した。

第２の研究分野は，American Council of Learned Societies客員研究員として，シカゴ大学にてノーベル経済学賞受賞者ジョージ・スティグラー教授の指導の下に経済学史の研究に従事した昭和53年から今日に至るまでの研究である。とりわけケインズ生誕100周年に当る昭和58年の４月から１年間にわたり，『経済セミナー』に連載された論稿「ケインズ『一般理論』私注」に端を発した賃金基金説に関する一連の学説史的研究は，教授のライフ・ワークとも言える力作である。それはケインズ，ピグー，マーシャル，スミス，リカード，ジェイムズ・ミル，マルサスの系譜を経て，サイモンにまで至る壮大な学説史研究である。とりわけ最近の中心的テーマは，サイモンの『管理組織行動—管理組織における意思決定過程の研究』及びそれに関連する諸論文の検討を通じて，サイモンの「知足的行動」の概念から「限定合理性」の概念への移行過程という現代的視点からも大変興味深い内容となってきている。

以上のような学術研究論文の外に教授は，翻訳や書評などを通じて経済学の啓蒙活動にも従

事してこられた。具体的には，ミルトン・フリードマンの『資本主義と自由』，そしてリチャード・ギルの『ミクロ経済学入門』などの経済学の名著に加え，マーチン・ブロンヘンブレンナー「ハイフン付きアメリカ人——その経済的側面」なども翻訳している。

教授は教育者，研究者としての多大な貢献にとどまらず，学会の運営や学内行政についても貢献された。学会においては，わが国最大の経済学系学会である理論・計量経済学会（現在の日本経済学会の前身）の理事を平成２年から２期６年つとめられた。その間，平成３年には同学会の大会運営委員会委員長として企画・運営を主宰され，大会を成功裡におさめられた。また翌年には同学会の運営委員会委員として企画・運営に参画するとともに，パネルディスカッション「日本経済とマクロ経済学の進路」の企画を立案，自らその座長をつとめ，好評を博した。学内にあっては平成４年から平成５年まで経済学部の評議員をつとめられている。

また，国際協力課からの委嘱により，英文カタログの企画に参与されるとともに，北大史(英文）の執筆陣のお一人として尽力され，その後も２年に１回の改訂に携わってこられた。

教授にはイギリスのプロフェッサーの風格が備わっており，教授が口にする話題は経済学という狭い学問的枠をはみだし，教授の博識に対してわれわれはその足下にも及ばない。教授が停年という制度によって本学を去られることは誠に哀惜の念にたえない。いまは，ただ，これまでにも増す学問上の御活躍をひたすらお祈りするのみである。

平成11年３月

北海道大学経済学部長　　内　田　和　男